

# A COMPARATIVE STUDY OF THE STORYTELLING TRADITIONS OF CENTRAL ASIA AND JAPAN

KHALMIRZAEVA, Saida / ハルミルザエヴァ, サイダ

---

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

219

(発行年 / Year)

2016-09-15

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第382号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2016-09-15

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013423>

博士学位論文  
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	KHALMIRZAEVA Saida
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 606 号
学位授与の日付	2016 年 9 月 15 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 国際日本学インスティテュート専担教授 Steven G. NELSON 副査 国際日本学インスティテュート専担教授 小秋元 段 副査（外部）東京工業大学教授 Hugh DE FERRANTI

A Comparative Study of the Storytelling Traditions of Central Asia and Japan  
『日本と中央アジアの語り物に関する比較研究』

1. はじめに

ハルミルザエヴァ・サイダ氏提出学位請求論文 *A Comparative Study of the Storytelling Traditions of Central Asia and Japan* (『日本と中央アジアの語り物に関する比較研究』) は、ハルミルザエヴァ・サイダ氏が法政大学大学院人文科学研究科（国際日本学インスティテュート）博士後期課程に在学中の 2011 年から 2016 年までの間に、『法政大学大学院紀要』、国際日本学研究所発行『国際日本学』、国際会議の報告書、および市販の論文集等に発表した諸論考（13 篇、うち査読付き 9 篇）を、全体を一つの体系的な論文として英文でまとめ直したものである。

最初に本研究の基本構成を示すと、下記の目次のように、序論、本論 3 部 5 章、および結論となる（和訳は概要の該当個所に掲げる）。

**INTRODUCTION**

**PART I THE CENTRAL ASIAN STORYTELLING TRADITION**

**I. THE ORAL TRADITION OF CENTRAL ASIA: BAKHSHI**

- 1 *Bakhshi* in the past and today
- 2 Acquisition of storytelling skills and *terma*

**II. MEMORIZATION AND IMPROVISATION IN THE TRADITION OF BAKHSHI:  
ANALYSIS OF MULTIPLE PERFORMANCES OF ALPOMISH**

- 1 Application of the Oral-formulaic theory to the study of the Central Asian storytelling

tradition

- 2 Analysis of variants of *Alpomish* recorded from different storytellers
  - 2.1 Birth of the hero
  - 2.2 Origin of the bow and the nickname
- 3 Analysis of variants of *Alpomish* recorded from the same storyteller
  - 3.1 Analysis of 'Return of the hero' in three performances by Qakhor-bakhshi: macro-level flexibility
  - 3.2 Analysis of 'Return of the hero' in three performances by Qakhor-bakhshi: micro-level flexibility
  - 3.3 Analysis of 'Return of the hero' in three performances by Mukhammad-bakhshi: macro-level flexibility
  - 3.4 Analysis of 'Return of the hero' in three performances by Mukhammad-bakhshi: micro-level flexibility
  - 3.5 Analysis of 'Return of the hero' in three performances by Shodmon-bakhshi: macro-level flexibility
  - 3.6 Analysis of 'Return of the hero' in three performances by Shodmon-bakhshi: micro-level flexibility
- 4 On the degree of improvisation in multiple performances of *Alpomish*, and on the origin of formulas in the tradition of *bakhshi*

## **PART II THE JAPANESE STORYTELLING TRADITION**

### **III. THE ORAL TRADITION OF JAPAN: BLIND *BIWA* PLAYERS FROM KYUSHU**

- 1 Origins of blind *biwa* players
- 2 The last blind *biwa* players from Kyushu
- 3 The repertory of blind *biwa* players from Kyushu

### **IV. MEMORIZATION AND IMPROVISATION IN THE TRADITION OF BLIND *BIWA* PLAYERS: ANALYSIS OF MULTIPLE PERFORMANCES OF *WATAMASHI*, *KIKUCHI KUZURE* AND *SHUNTOKUMARU***

- 1 Application of the Oral-formulaic theory to the study of the blind *biwa* players' tradition
- 2 Analysis of multiple performances by Yamashika Yoshiyuki
  - 2.1 Analysis of *Watamashi*
  - 2.2 Analysis of *Kikuchi Kuzure*
  - 2.3 Analysis of *Shuntokumaru*
- 3 On the degree of improvisation in performances by Yamashika, and the origin of formulas in the tradition of blind *biwa* players

## **PART III *ALPOMISH* AND *YURIWAKA***

### **V. *Alpomish* and *Yuriwaka*: On the Possibility of the Story's Transmission**

## 1 On the origin of *Alpomish*

### 1.1 *The Odyssey* and *Alpomish*

### 1.2 *The Tale About Good Prince and Bad Prince* and *Alpomish*

### 1.3 Hypothesis on the origin of *Alpomish*

## 2 On the origin of *Yuriwaka*

### 2.1 *Alpomish, Yuriwaka Daijin* and *Yuriwaka Sekkyō*

### 2.2 *The Odyssey, The Tale about Good Prince and Bad Prince, Alpomish* and *Yuriwaka*

### 2.3 Hypothesis on the origin of *Yuriwaka*

## CONCLUSION

以下、全体を「本論文」と呼ぶことにする。

## 2. 本論文各部の概要と評価

本論文について、著者は以下のように研究の内容を紹介している。(口頭試問時に配付された論文要旨に拠る。一部表記を改める。)

語り物は遠い昔に発生し、偉大な英雄と、特別な歴史的事件を語り伝えた。語り物の存在は世界中に確認できる。その歴史は非常に長く、語り物の発生起源や初期段階における発展などを究明することはほとんど不可能であろう。しかし、現在世界中で関心が失われ、消えつつある語り物を研究し、各地域・異文化において得られた研究結果を比較・分析することにより、それぞれの語り物の法則性や特異性などを明らかにすることが可能である。

語り物は長い歴史を持つジャンルであり、その研究の理論的な基盤をなしたのは、パリー (Milman PARRY) と、彼の研究協力者であるロード (Albert B. LORD) である。20 世紀前半においてパリーとロードとの努力により形成された「口頭的構成法」という理論は、後の時代の語り物研究に影響を及ぼし、現在でも有効である。この理論の最も重要な概念は「フォーミュラ」である。フォーミュラとは、リズムカルパターンに沿った一定の単語の結合によって形成された語り物の構成単位である。語り手は多様なストーリーやその中の個々の場面に応じてフォーミュラをそのまま使用し、即興的に語り物を展開することができる。

口頭的構成法は世界の多くの研究者により適用されてきたが、一方で再検討も加えられてきた。口頭的構成法はどの伝統に対しても適応できるのか、語り手のフォーミュラはどのように生まれてくるのかなど、未解決の問題がいまだに残っている。

本論文は、古代・中世において中央アジアから日本へ、仏教思想を伝えた交流があった事実を前提とし、伝承形態とその内容の比較という二つの問題を中心とした。

- 伝承形態：本研究では、中央アジアと日本の語り物を具体例として即興によるス

トリーや詞章の異同の分析を行った。それによって語り物と即興性との関係やフォーミュラの起源について考察し、口頭的構成法を再検討した。

- 伝承内容：中央アジアの『アルポミシュ』 *Alpomish* と日本の『百合若大臣』という伝承の比較分析を行い、中央アジアと日本の伝承の起源について考察した。

以上が論文要旨からの引用である。各部の概要とその評価は以下の通り。

## 第 I 部 中央アジアの語り伝統

### 第 1 章 中央アジアの語り物——バクシ

#### 第 1 節 バクシの過去と現状

#### 第 2 節 語り物の習得とテルマ

### 第 2 章 バクシの伝統における暗記と即興性——『アルポミシュ』の複数バージョンの分析

#### 第 1 節 口頭的構成法の中央アジアの語り物への適用

#### 第 2 節 異なる語り手による『アルポミシュ』の分析

##### 2.1 主人公の誕生

##### 2.2 弓の起源と主人公のあだな

#### 第 3 節 同一語り手による『アルポミシュ』の分析

##### 3.1 カホール・バクシの語った「主人公の帰国」の分析：マクロレベルでの柔軟性

##### 3.2 カホール・バクシの語った「主人公の帰国」の分析：ミクロレベルでの柔軟性

##### 3.3 ムハムド・バクシの語った「主人公の帰国」の分析：マクロレベルでの柔軟性

##### 3.4 ムハムド・バクシの語った「主人公の帰国」の分析：ミクロレベルでの柔軟性

##### 3.5 ショドモン・バクシの語った「主人公の帰国」の分析：マクロレベルでの柔軟性

##### 3.6 ショドモン・バクシの語った「主人公の帰国」の分析：ミクロレベルでの柔軟性

#### 第 4 節 『アルポミシュ』の複数演唱における即興性の度合いとバクシの語り物におけるフォーミュラの起源について

#### ・概要

口頭伝承の研究には、担い手についての理解が必要であることから、第 1 章第 1 節では中央アジアのバクシ *bakhshi* と呼ばれる語り手について、その起源や社会に果たしてきた役割、現在おかれている状況などについて考察している。過去のバクシや語り文化に関して主として先行研究に拠り、現在活動しているバクシやその演唱する語り物に関しては、著者が 2009 年と 2011 年の現地踏査で収集したデータを使用している。結果を要約すると、バクシは本来仏教の伝承者としての役割もあったが、宗教との関わりは時代とともに失われていった。過去において語り伝えた語り物は中央アジアの権力者や一般庶民に人気があり、バクシの数も多かったが、19 世紀末から語り物への関心が薄れ、バクシの数も激減し、現在語り文化はウズベキスタンの南部にのみ残っている。

第2節では語り物の伝授法や、即興で作られるテルマ *terma* という短い詩について検討している。語り物の伝授過程において、師匠は弟子が即興的に語る能力を養い、師匠が弟子の前で語り物を演じて、その技法を見習わせるのが伝統的な継承法である。バクシのレパートリーにはテルマと、『アルポミシュ』 *Alpomish* 『ヨドゴル』 *Yodgor* 『ルスタムホン』 *Rustamkhon* 等の語り物が含まれる。テルマはバクシが語りを使用する伝統的な基礎単位であり、その重要性を鑑みて、ここでは著者は2011年の現地調査中に記録したテルマを分析し、バクシの語り方を特徴づける基本的な韻やリズムの作り方について考察している。

第2章では中央アジアの語り物と即興性との関係について考察している。第1節では中央アジアの語り物に用いられる言語の特徴に関する先行研究をまとめ、特にジルムンスキ (Victor JIRMUNSKY)、ザリフォフ (Hodi ZARIFOV)、フェルドマン (Walter FELDMAN) の研究を紹介している。第2節では即興で語られる『アルポミシュ』の粗筋が、語り手によってどこまで変えられ、どの程度固定化されているかについて検討している。4人の語り手から記録された『アルポミシュ』の分析を行った結果、『アルポミシュ』の粗筋は語り手によって大きく流動するが、特定の構成要素 (モチーフとも名付けられる部分) はある程度固定化しており、異なる地域の語り手の『アルポミシュ』においても共通することが明らかになった。

第3節では中央アジアの語り物の演唱における即興性の度合いを特定するために、2011年の現地調査の際に3人のバクシから、それぞれ3回記録した、合計9つの『アルポミシュ』の「主人公の帰国」場面の詞章を分析している。その結果、3人のバクシは全員、語り物を演唱する際に事前の詞章の暗記に頼らず、語り物の長さを必要に応じて増減し、即興的に『アルポミシュ』を構成・展開させていることが明らかになった。

第4節では『アルポミシュ』の詞章の分析結果を基に、中央アジアの語り物の演唱における即興性の度合いや、即興による伝承の変化について考察している。中央アジアの語り物は即興性の度合いが高く、伝承は語られる度に激しい変化を伴うものである。語り手は、毎回、語り物の長さをほぼ無制限に増減することができ、なおかつ、詞章の形式は散文・韻文を自由自在に駆使する。著者はこの千差万別の語り方を「純即興」と名付けている。また、詞章における繰り返し部分、いわゆるフォーミュラの起源についても考察を行っており、同一の語り手が語った複数の『アルポミシュ』において頻繁に現れるフォーミュラは、演唱を繰り返し行うことによって無意識的に固定化したものであるとの結論に達している。

#### ・評価

ウズベキスタン南部で現在も語り物芸能を伝承している人々を対象に現地調査を行い、インタビューや演唱の映像資料を自ら収集し、そのデータを元に詳細な分析を行っている。中でも、第2章第3節において、複数の語り手 (バクシ) が同じ演目の同じ部分を複数回語った内容を比較分析し、語りの流動性を論じた部分は、実証的で説得力が

ある。今回の分析により得られた結果は、これまでの中央アジアの語り物と即興性との関係に関する研究成果を補いながらも、部分的に再考を促すものとなった。

むろん、著者の母語がロシア語であり、ウズベク語も自由に使えることが、今回の現地調査において最大限に活かされている。過去の伝承に関する文献調査においても同様に、日本でほとんど知られていないロシア語の先行研究が丁寧に紹介されており、その点においては、これまで著者が公にしてきた論考もすでに日本の関連学会に大きく貢献していると思われる。

なお、英語の文献に関しては、同じバクシたちの伝承を扱った Feldman の研究を紹介しているのは当然ではあるが、今後はより広い視野から、口承文学、特に口承叙事詩 oral epic に関する欧米の先行研究に目を配る必要があると思われる。

第 I 部の課題については、著者は第 2 章の末尾に、次の 4 点を挙げている。①分析は 2011 年の現地調査の際に収集されたデータにのみ基づいているが、今後予定されている現地調査で更なるデータを収集し、時間の経過とともに各バクシの語りがどのように変化して行くかを調べること、②分析対象の演目を『アルポミシュ』以外に広げること、③経験を積んだ、円熟した演唱を行うバクシだけではなく、もっと若い語り手をも研究対象とし、師匠と弟子の語りを比較すること、④パフォーマンスにおいて詞章と同等の重要性を持つ音楽（語りの「旋律型」や楽器伴奏）にも目を配ること。③に関してはバクシの伝承における個人様式の形成を解明することにつながる可能性があり、期待が大きい。また④については、下記「本論文に対する総合的評価」で改めて述べる。

## 第 II 部 日本の語り伝統

### 第 3 章 日本の語り物——九州の琵琶弾き

#### 第 1 節 琵琶弾きの起源

#### 第 2 節 九州の最後の琵琶弾き

#### 第 3 節 九州の琵琶弾きのレパートリー

### 第 4 章 九州の琵琶弾きの伝統における暗記と即興性——『ワタマシ』『菊地くずれ』

#### 『俊徳丸』の複数バージョンの分析

#### 第 1 節 口頭的構成法の九州の琵琶弾きへの適用

#### 第 2 節 山鹿良之が語った伝承の分析

##### 2.1 『ワタマシ』の分析

##### 2.1 『菊地くずれ』の分析

##### 2.3 『俊徳丸』の分析

#### 第 3 節 山鹿良之の語った伝承の複数演唱における即興性の度合いと九州の琵琶弾きの語り物におけるフォーミュラの起源について

#### ・概要

第 3 章第 1 節では琵琶弾きの起源や、社会に果たしてきた役割について検討している。第 2 節では、山鹿良之（1901-96）と大川進（1918-2000）という 2 人の語り手の伝記を

紹介し、琵琶弾きの生活様式や語り物の伝授法について、具体例を挙げながら検討を行っている。第3節では、琵琶弾きのレパートリーを紹介している。九州の琵琶弾きの場合、現在伝承が途絶しており、過去において活動していた語り手とそのレパートリーについては先行研究に拠っている。

要約すると、琵琶弾きは大陸の語り文化と密接な関係にあったという説があり、彼らの語った経典に韓国のシャーマンが語る『地神経』があることは、その証拠の一つとなる。また、諸説はあるが、琵琶弾きが使った琵琶も大陸から伝わったものとも考えられ、琵琶弾きの担う語り文化は大陸のそれと繋がりがあある可能性がある。琵琶弾きはかねてから民間経典の読誦や語り物を行い、民間儀礼や庶民の娯楽において重要な役割を果たしてきた。しかし、20世紀中にその数が激減し、20世紀初期において300人以上もいた琵琶弾きは現在では一人も残っていない。

琵琶弾きの語り物の継承方法に関しては、口移し（師匠の言う通りに繰り返して暗記する方法）と聞き覚え（聞いて覚える方法）といった二つの方法がある。口移しにより語り物と語り方を習得した弟子は次第にそのレパートリーを増やしていく。琵琶弾きのレパートリーに関しては、経典や祓い行事に加えて、『小野小町』『道成寺』『菊池くずれ』『百合若大臣』等の語り物の他、「チャリ物」（滑稽物）も含まれていたとする。

第4章では琵琶弾きが演唱した語り物と即興性との関係について検討している。第1節では「口頭の構成法」理論を琵琶弾きの語り物に適用した兵藤裕己とデ・フェランティ（Hugh DE FERRANTI）の先行研究を取り上げ、特に詞章のフォーミュラ（定型句）や詞章の固定度の問題を中心に紹介している。

第2節では琵琶弾きの語り物の演唱における即興性の度合いを特定するために、山鹿良之が語った『ワタマシ』『菊池くずれ』『俊徳丸』（それぞれ一部）の複数バージョンの詞章を比較分析している。その結果、琵琶弾きの中でも最もレパートリーが豊富で、即興性にも富む語り方をする山鹿の場合でも、演唱毎に繰り返される詞章が多いことを明らかにしているが、こうした繰り返される詞章は、習得段階における暗記によって固定化された部分であると推測している。

第3節では先行研究や第2節の詞章の分析結果を基に、琵琶弾きの語り物の演唱における即興性の度合いについて考察している。一部の例外を除いて、琵琶弾きの語り物は即興性の度合いが比較的 low、暗記によって固定化された部分が多いという結論に達している。これは、語り物の伝授や伝承の過程において意識的な暗記の役割が大きいためからだろうとしている。また、詞章における繰り返しの部分、いわゆるフォーミュラの起源についても考察を行っている。山鹿の語り物においてフォーミュラは意識的に固定化された部分であり、これらは一度固定化されると、後に同一の伝承や他の伝承において無意識的に再現されるようになる、という結論に達している。

#### ・評価

第I部と同様、同じ演目の同じ部分を複数回語った内容を比較分析し、語りの流動性



を測る試みを第Ⅱ部の中心（第4章第2節）に据えているが、ウズベキスタンの現状とは異なり、九州の琵琶弾きの場合は伝承が途絶しており、著者が自らデータ収集を行うことはもはや不可能である。そこで、過去の伝承を文章化した文献資料や、琵琶弾きの演唱の録音を用いることとなり、結果的に「最後の琵琶法師」と呼ばれた山鹿良之による演唱を研究対象とすることになった。これ自体は仕方のないことではあるが、第Ⅱ部と比べて比較分析の対象が狭いことは確かで、そのため結果についても考慮する必要がある。

なお、『百合若大臣』を琵琶弾きの演目として挙げていること（第3章第3節）については、根拠として挙げているもの（折口信夫 1975、成田守 1985、何真知子 1972）の信憑性にやや問題があり、更なる裏付けが必要であろう。九州の琵琶弾きが他の口承文芸等から貪欲に物語を吸収していた事実を考えれば、元より『百合若大臣』の伝承があったとも限らず、むしろその伝承を有した、九州の他の芸能から摂取した可能性もある。

第Ⅱ部の課題については、著者は第4章の末尾に、次の点を挙げている。①パフォーマンスにおいて詞章と同等の重要性を持つ音楽（語りの「旋律型」や楽器伴奏）にも目を配ること、②琵琶弾きの伝承は途絶しているので現地調査等によって新たにデータを収集することは不可能だが、今回入手できなかった録音も存在するようなので、入手できた暁に各演目の比較対象を広げること、③琵琶弾きのレパートリーにある演目と、文献資料や他の口承文芸にある、同テーマを扱った演目と比較し、起源や伝承経路について考察を行うこと。やはり①については、下記「本論文に対する総合的評価」で改めて述べる。

### 第Ⅲ部 『アルポミシュ』と『百合若大臣』

#### 第5章 『アルポミシュ』と『百合若大臣』——伝承の伝播の可能性について

##### 第1節 『アルポミシュ』の起源について

- 1.1 『オデュッセイア』と『アルポミシュ』
- 1.2 『善事太子と悪事太子』と『アルポミシュ』
- 1.3 『アルポミシュ』の起源に関する新仮説

##### 第2節 『百合若大臣』の起源について

- 2.1 『アルポミシュ』、『百合若大臣』と『百合若説経』
- 2.2 『オデュッセイア』、『善事太子と悪事太子』、『アルポミシュ』と『百合若大臣』
- 2.3 『百合若大臣』の起源に関する新仮説

#### ・概要

第5章では中央アジアの『アルポミシュ』と日本の『百合若大臣』という二つの伝承の影響関係について考察している。

第1節では先行研究や『オデュッセイア』『善事太子と悪事太子の物語』『アルポミシュ』における共通モチーフの分析結果を踏まえ、『アルポミシュ』の起源に関する新仮

説を立てている。『アルポミシュ』は、説経を通じて民間伝承の領域に入った『善事太子と悪事太子の物語』と、古代ギリシアから中央アジアに伝播してきた『オデュッセイア』から影響を受けて成立した可能性がある、とする。

第2節では『アルポミシュ』と『百合若大臣』と、そして日本で長らく『百合若大臣』と関係のある伝承とされてきた『善事太子と悪事太子の物語』と『オデュッセイア』との共通モチーフの比較分析を行っている。先行研究や分析結果に基づく考察の結果、中央アジアに成立した『アルポミシュ』の原型ともいべきものは、仏教と関わる語り文化を通じて東へ伝播していった可能性があり、さらに、この伝承は日本にも伝わり、『百合若大臣』の原型となったと想定できる、としている。

#### ・評価

『百合若大臣』の起源に関する追究は、従来、日本で比較的注目を集めてきた研究課題である。著者はここで同じモチーフを有する物語の、中央アジアや日本における伝承の展開事例を豊富に分析しており、首肯できる新仮説を立てている。すでに説話・伝承学会、アジア民族文化学会で複数回口頭発表をしており、雑誌論文の採用もあり、注目されている。

第Ⅲ部の課題については、著者は第5章の末尾に、次の点を挙げている。①中央アジアの他の『アルポミシュ』伝承を研究対象に加えること、②日本の物語伝承との類似性が『アルポミシュ』以外の中央アジアの物語伝承に存するか否か検討すること、③中央アジアからの伝承経路があったとすれば、その実体は何かを明らかにすること、④中国・朝鮮半島に類似する物語があるか否か、更に調査研究を続けること。⑤「主人公(夫、王等)の帰国」というモチーフを共通に持つ伝承がユーラシア大陸に広く分布しており、比較文学の観点から更なる検討が必要とのこと。

### 結論

#### ・概要

中央アジアと日本の語り物は、双方とも口頭で即興的に展開・構成されるものであるが、それらの相違点は、両者を比較することで明らかにすることができる。語り物の伝授法や伝承にかかわる在り方は、中央アジアと日本において大きく異なる。例えば、中央アジアの伝承は語られる度に激しい変化を伴い、その多くは語り手の独自性や創造性を表している。それに対し、日本の琵琶弾きの場合、語り手がそれほど独自性や創造性を追求しないため、伝承は固定化の度合いが高く、激しい変化を伴わない傾向にある。中央アジアと日本の語り文化に見られる即興性の度合いは、それぞれの地域の歴史や社会や文化、そして語り手集団の特徴を反映しているのではないかと、とする。

中央アジアと日本の語り文化の起源や発展過程に対する理解や、語り物の伝授・伝承の仕組みに対する理解は、『アルポミシュ』のような伝承の起源やその伝播を追求する上で重要である。仏教を通じた中央アジアと日本の語り文化は、伝承の伝播経路へ示唆を与え、語り物のモチーフ構成の比較分析を行うことによって、伝承が言語の枠を超え

て伝播していくメカニズムを理解し説明することができる、と論を結ぶ。

### 3. 本論文に対する総合的評価

本論文は、比較文学の研究成果として、中央アジアと日本における語り物の生成、変容、伝承の仕組みを理解することに大きく貢献している。また、中央アジアと日本の伝承の一部について、その起源に関する新仮説を立てており、文学史のみならず、中央アジアと日本の文化交流史にも新たな展望をもたらすものである。

全体を一つの体系的論文として考えた時、第Ⅰ・Ⅱ部と第Ⅲ部とでは論の目的が異なるように見えることは否めないが、方法論においては共通基盤を有している。本論文全体の核になっているのは各物語の詞章に対する、詳細で高度な比較分析である。第Ⅰ・Ⅱ部ではそれを二つのレベル、すなわちマクロレベル（物語のモチーフの有無と配置）とミクロレベル（物語詞章における定型句、フォーミュラ等の有無と配置）に分けて分析を行っているが、第Ⅲ部で分析対象となっているのが正にモチーフの有無と配置であり、第Ⅰ部第2章第2節および第Ⅱ部第4章第2節における分析方法の、より大きな問題への適用例といえよう。

本論文で強調されているのは演唱（パフォーマンス）における「即興性」の度合いである。自ずと関連してくるのは、語り手の「独創性」(originality)の問題であろう。著者の文章の中に、詞章の固定度が高い場合、それが習得段階における「暗記」によるものであり、逆にその固定度が低い場合、より創造的な「即興」が行われている結果である、という二者択一的な判断がなされている個所がある。しかし、例えば第2章で明らかになった現象、つまり特定のバクシの演唱に比較的高いレベルの固定性が存在することは、必ずしも「暗記した」(memorized)ものではなく、むしろ繰り返し演唱を行っているうちに、効果的な表現法として「思い出された」(remembered)ものである可能性はないのか (cf. Lord 1991)。一方、かつての琵琶弾きが、他の口承文芸、ひいては浪花節や新劇のような新しい芸能から物語を取り入れることで自らのレパートリーを広げたり、既存のよく知られた物語の中に新しい「チャリ場」(滑稽場面)などを挿入したりしていたことも判明しており、これも当然「独創性」と認められよう。言い換えれば、「独創性」に対する捉え方を、より多面的にして、論述方法の精度を上げていく必要があるように思われる。

もう一つ、ぜひとも考慮すべきは、両伝承がどのような発展（もしくは「衰退」）段階にあったか、ということである。中央アジアの伝承はかつての規模では行われていないが、伝承者は未だに多く、若い伝承者も育っている。一方、九州の盲僧琵琶の伝承はすでに途絶しており、録音が残っていてもそれはいわば風前の灯の如き状態にあった頃のものである。口頭伝承が途絶えようとする、内容が固定化する傾向になる。途絶を免れても、日本の平家語り（平家琵琶）のように、伝承が「化石」になった形でしか伝えられないことも多い。両伝承の流動性を測る場合、こうした事情への配慮も不可欠

ではないか。

先述の通り、本論文の核となっているのは物語詞章に対する詳細で高度な比較分析だが、こうした語り物のパフォーマンスにおいて、音楽も詞章とほぼ対等の重要性を持つ。本論文で語り手が自ら奏でる伴奏楽器については表面的な説明はあるものの、演唱における役割については言及がない。しかし、それよりも重要なのは、パフォーマンスにおける声の役割であり、そこには、いわば「音楽の定型句」ともいえる「旋律型」、伝統的に表現すれば「フシ（節）」の存在が最も重要である。先行研究において、九州の琵琶弾きが駆使したフシ体系の在り方も明らかになっており、中央アジアのバクシの伝承についても特定の名称を持った旋律様式の存在が明らかにされている（Feldman 1997 に言及のある *garipnamä / turkmennamä* 等の *standard epic melody*）。詞章における定型句が詞章の流動性の指標になるように、旋律型も音楽の構成要素として音楽を形作り、その音楽に乗せられる詞章の形式や内容に、当然影響を及ぼしてくる。思うに、音楽構造の比較研究を進めていけば、著者が強調する詞章の固定度の差異よりも、両伝承が口頭伝承として共通に持っている特徴が多く見えてくるのではないか。

ともあれ、つまるところ、期待大である。著者はウズベキスタン出身で、ロシア語を母語とするが、これまで和文論文を多く発表してきたし、今後も和文で発表し続けるだろう。しかし今回は、研究がもつ国際的な意義と可能性を鑑みて、あえて英文で書き上げている。表現力の限界に挑みながらの作業となったので、表現が直裁過ぎるところもあり全体的にやや硬い印象だが、この経験はこれから英文で発表していく中で必然的に生きてくるものと思う。

来日しておよそ 10 年、日本における語り物研究に触発され、現地調査のための豊かなフィールドを自国に開拓している。日本のみならず、ほとんどの先進国でももはや難しくなってきた、生きた語り物文化を研究対象にしていくことができ、それによって国際的な口承文芸・口承文学研究にも貢献しながら、発展の方向によっては日本における同分野にも新しい風を吹き込む将来性を感じさせる論文であり、高く評価されてしかるべきものと考えるのである。

#### 4. 審査小委員会の結論

審査小委員会は、ハルミルザエヴァ・サイダ氏提出学位請求論文 *A Comparative Study of the Storytelling Traditions of Central Asia and Japan* (『日本と中央アジアの語り物に関する比較研究』) を、上記のように評価し、本論文提出者が博士（学術）の学位を授与されるに十分な資格を有するとの結論に達した。